※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は、変更可能です。
※いずれの場合も、必ず A３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

【様式１】

<エントリーシート> ※ 事 務 局 記 入 欄 No.：C － 21	部門 校内研修部門	学校名・氏名 大阪府立和泉支援学校
	活動名 私立学校支援体制の検討 ―特別支援学校と教育委員会の連携―	

課題の設定：

公立諸学校に対しては、就学前の幼児から大学生まで連続性のある支援が検討・実施されているが、行政管轄の違い等の実際的な課題がある私立学校に対する支援は稀であり、システム化されていない。そのような現状の中、大阪府では教育庁内に私学課が編入された経緯から、私立学校から特別支援学校に対して支援の相談依頼があった。広い通学域をもつ私立学校への支援を継続するために、特別支援学校と学齢簿のある教育委員会（以下、教委）が協働し、私学支援システムの検討と実践を進めることにした。

方針・計画：

大阪府センボク市（仮称）在住、私立 X 中学校 1 年男子生徒 A についての相談依頼があり、支援の検討が始まった。生徒 A は、人間関係形成やコミュニケーションの困難さを背景に、同級生・教員に対する暴言・授業妨害、授業への参加拒否等を頻発する状態にあった。

実態把握の結果、生徒 A は「発達障がいに起因する認知機能やソーシャルスキルに課題があり、指導には継続性が必要」「義務教育段階にあり、学齢簿がセンボク市教育委員会にある」「私立 X 中には個別指導できる部屋も人材もない」との現状が明らかになり、「①支援や指導のシステムと連携のあり方」を検討し、そのシステムを実働させることで「②教育的ニーズに応じた指導・支援」に取り組むことにした。

活動内容：

支援や指導のシステムと連携のあり方については、特別支援学校・市教委・私立 X 中三者が、図１「支援コーディネーター（以下、Co）チームづくり(案)」を共有し、私学にも Co を設置し、三者が協働する必要性等を共通認識して、私学支援システムを形成した。実際の支援は、およそ週１回１時間の頻度で、市役所の一室に、和泉支援学校スタッフ・前籍小学校の特別支援教育 Co・市教委指導主事及び本人が集まり、「他校通級」形態による支援と指導を実施した（写真１は初回の様子）。なお、支援時間は放課後とし、現籍私立 X 中 Co とは、指導実施ごとに電話やメールで学習内容や引継ぎ事項を確認した。指導内容は、主にコミュニケーション（写真２）・認知コントロール（図２）・自己理解（図３）を課題として構成し、取り組んだ。

活動の成果：

事後評価では、メリットとして「本人が通う形態で、支援者側の負担が少ない」「計画的で連携した取り組みができる」「結果的に、Co の実践的研修になる」「新たな連携のあり方をつくれた」等があげられた。一方、デメリットとして「活動が放課後のため、支援時間が制限される」「現籍私立学校 Co と共有しづらい」「件数が増えたら、対応しきれない」等があげられた。本事例の私学支援システムには、通級指導の形態に特有の課題がみられたが、特別支援学校・市教委・私立 X 中が連携した支援のメリットが明らかになると同時に、まとめの報告会を実施することで、私立 X 中教員全体の指導力・支援力の向上につなげることができた。

アピールポイント（アイディアや工夫）：

・今まで稀だった「教育委員会・私立学校・特別支援学校の連携・協働」。協働によるそれぞれのスキルアップ。
・特別支援教育のノウハウを活かした私立学校支援。私立学校教員の指導力・支援力の向上。
・市役所に生徒本人が通う「他校通級」形態による支援や指導。

<写真、図表添付欄>

図１関係機関で共有・共通理解した「支援コーディネーターチームづくり(案)」

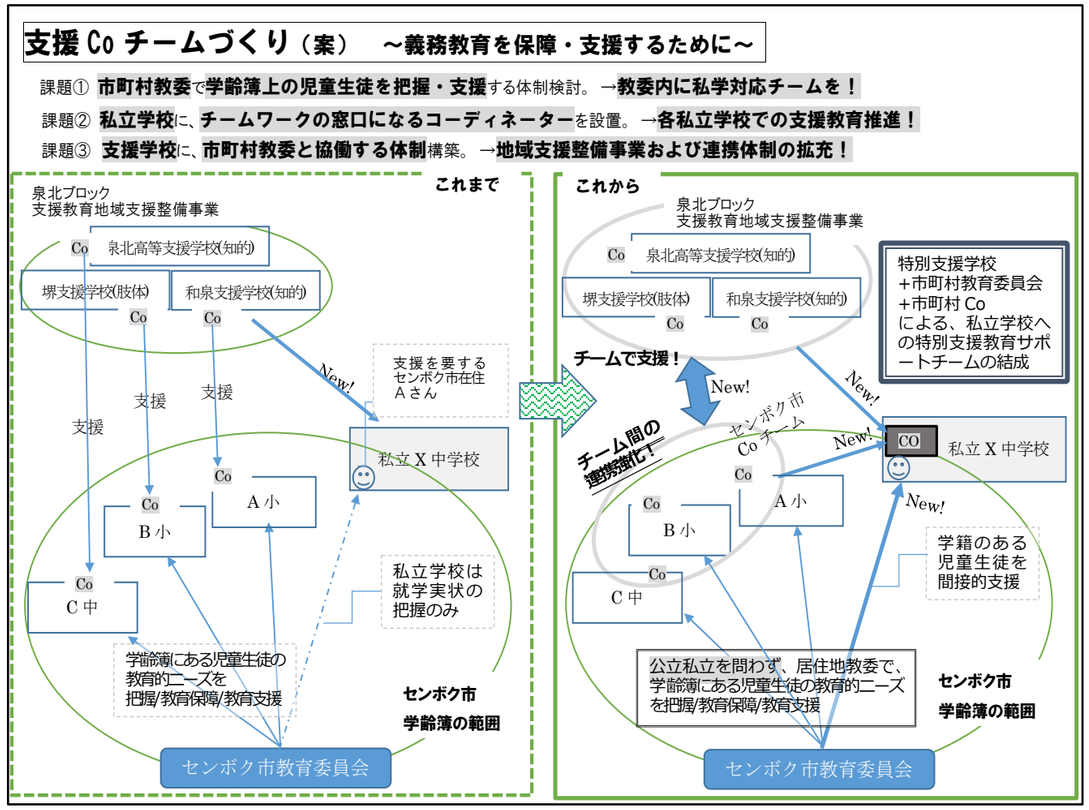

写真１ 「他校通級」形態による指導（初回）

図２ 認知コントロール課題「違った考えをしてみよう」

写真２ コミュニケーション課題「風船バトミントン」
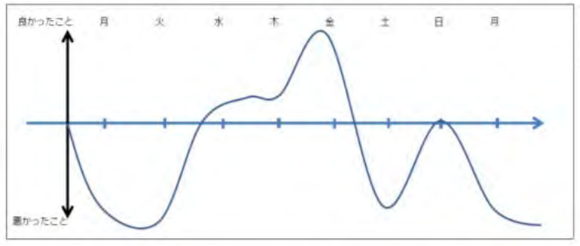
図３ 自己理解課題「山あり谷ありワーク（１週間の振り返り）